15　次の文章を読み、後の問いに答えよ。〈名古屋市立大〉二〇二二年度出題

　中比、三井寺に智興内供と云ひて、たふとき人ありけり。年高くなりて、いかなる宿業にてか、世の中ここちをして、限りになりければ、弟子ども集まりて泣き悲しむ時、晴明と云ひて、神如なる陰陽師ありけり。これを見て云ふやう、「此の度は、限りある定業なり。いかにも叶ふべからず。それにとりて、Ａ志深からん弟子なんどの替らんと思へるあらば、祭り奉りてん。其の外には、いかにもいかにも力及ばず」となん云ひける。

　多くの弟子どもさしつどへるほどに、此の事を聞きて、内供は苦しみのたへがたきままに、「もし、替る人やある」と、並び居たる弟子どもを次第に見まはせど、言にこそ云へど、誠には捨てがたき命なれば、おのおの色を作りて伏し目になりつつ、ひとりとして「我、替らん」と思へるけしきなし。

　其の時、証空阿闍梨と云ふ人、年若くて弟子の中にありけり。弟子にとりては末の人なれば、誰も思ひよらぬほどに、進みて内供に申すやう、「我替り奉らんとなり。其の故は、法を重くし、命を軽くするは師に仕ふる習ひなり。いかで、①此の事を聞きながら、身命を惜しまん。いたづらに捨つべき身を、今三世の諸仏に奉りて、人界の思ひ出にせん。さらにいたましからず。但し、年八十なる母、今に侍り。我より外に子なし。もし、許されを蒙らずは、みづから身を捨つるのみにあらず、ａふたりが命尽きぬべし。よくよくことわりを申しきかせて、暇を乞ひて帰りまゐらん」と云ひて、座を立ちぬ。内供をはじめ、これを聞く人々、涙を流してあはれむ事限りなし。

　母のもとに至りて此の由を語る。「願はくは、嘆き給ふ事なかれ。たとひ本意の如く御跡に残りて、後世を訪ひ奉るとも、かく程の大なる功徳を作らん事、きはめて難し。今、師の恩を重くして命に替りなば、三世の諸仏もあはれみ、天衆・地類も驚き給ふべし。其の功徳をかさねて、母の後世菩提に廻向し奉らん。これ、まことの孝養なれば、則ちあやしき身一つ捨てて、ｂふたりの恩に報ひてん。況やまた、老少不定のさかひなり。もしいたづらに命尽きて、Ｂ御さきにたつ事も侍らば、其の時くやみて何かせん。何事をや此の世の思ひ出にせん」と泣く泣く云ふを聞きつつ、涙を流し、驚き悲しむもことわりなり。「わが愚かなる心には、功徳の多くならん事をも思はず。君いとけなかりし折りは、我にはぐくまれき。我、年たけよはひ傾きては、君を憑む事天地の如し。残りの命、今日明日とも知らぬ時に至りて、我を捨て、心と先立たむ事こそいと悲しけれど、其の志深き事を思ふに、師の命に替りなば、君が後世においては疑ふべからず。もし此の事を許さずは、仏もおろかにおぼしめし、君が心にもたがひなん。誠に老少不定の命なり。思へば夢まぼろしの前後なり。はやく君が心なり。とく浄土に生れて我を救ひ給へよ」と云ふ。涙を押へて云ひければ、②証空泣く泣く悦びて帰りぬ。やがて年・名乗り書きつけて、晴明がもとへやりつ。こよひ祈りかへ奉るべき由、云へり。

　かくて、夜やうやうふけ行くほどに、此の証空、頭痛み、ここちあしく、身ほとほりて堪へがたく覚えければ、我が房に行きて見苦しかるべき文など取りしたためつつ、年比持ち奉りける絵像の不動尊に向ひ奉りて申すやう、「我、年わかく、身さかりなれば、命惜しからざるにあらねど、師の恩の深き事を思ふによりて、今すでに彼の命にかはりなんとす。勤め少なければ、後世きはめて恐し。願はくは、明王あはれみを垂れて、悪道におとし給ふな。病苦すでに身をせめて、一時もたへしのぶべからず。本尊を拝み奉らん事、只今ばかりなり」と泣く泣く申す。その時、絵像の仏眼より血の涙を流し、「汝は師にかはる。我は汝にかはらん」とのたまふ御声、骨にとほり、肝にしむ。「あないみじ」と掌を合はせて念じ居たる間に、汗流れぬる身さめて、すなはち③ここちさはやかになりにけり。

　内供も其の日よりＣここちおこたりにければ、此の事を聞きて、おろかに思はんやは。後には、人にすぐれて相ひたのみたる弟子にてなむありける。

（『発心集』にもとづく）

問１　文中の波線部Ａ～Ｃを、現代語訳せよ。

Ａ　志深からん弟子なんどの替らんと思へるあらば

Ｂ　御さきにたつ事も侍らば、其の時くやみて何かせん。

Ｃ　ここちおこたりにければ

問２　文中の点線部ａ・ｂ「ふたり」が誰と誰を指すか、それぞれ答えよ。

問３　文中の傍線部①「此の事を聞きながら」について、どのようなことを聞いたのか説明せよ。

◎問４　文中の傍線部②「証空泣く泣く悦びて帰りぬ」について、その理由を、母の心情の変化と併せて説明せよ。

問５　文中の傍線部③「ここちさはやかになりにけり」について、誰が、どのようになったのか、その理由と共に説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ＝Ａ師への思いの深いような弟子などでＢ内供の身替わりになろうと思っている弟子がいるならば

Ａ＝４〔「志」の対象が示されていない場合は減点２。同格の「の」の訳出がなければ０。〕

Ｂ＝６〔意志の「ん」の訳出がなければ減点２。存続の「り」の訳出がなければ減点１。「弟子が」「者が」など同格の補いを欠くものは減点２。〕

Ｂ＝Ａ私が母上より先に死ぬことがありましたら、Ｂそのとき悔やんだとしてどうしようか、いやどうすることもできない。

Ａ＝５〔「私が母上より」が補えていない場合は減点２。丁寧語の訳出がなければ減点２。仮定条件の訳になっていなければ減点３。〕

Ｂ＝５〔反語表現が訳出されていない場合は０。〕

Ｃ＝病気が治ったので

問２　ａ＝証空・証空の母　　ｂ＝智興内供・証空の母

「証空の母」は「母」も可。「智興内供」は「師」「内供」も可。

問３　Ａ内供が死ぬことは避けられない定めであるが、Ｂ師を深く思う弟子が内供の身替わりになって死ねば、Ｃ内供は助かるということ。

Ｂ・Ｃが揃っていなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝４

Ｃ＝４〔「内供は助かる」という具体的な内容が書けていなければ０。〕

問４　Ａ息子に先立たれることをはじめは深く悲しんだ母が、Ｂ証空の決心の固さと後世の安寧を考えて思い直し、Ｃ証空が師の身替わりとなって死ぬことをＤ許してくれたから。

主語としての「母」およびＣ・Ｄが揃っていなければ全体０。「はじめは」「思い直し」など、母の心情の変化を示す表現がなければ減点２。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝２／Ｄ＝２

問５　誰がどのように＝証空が、耐え難い病苦が治まって気分が清々しくなった。

「証空が、〜になった」の形で解答が書けていなければ全体０。

　　　理由＝Ａ不動尊が、Ｂ証空をれみ、Ｃ証空の身替わりとなったから。

Ａ・Ｃが揃っていなければ全体０。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４

【現代語訳】

そう遠くない昔、三井寺に智興内供といって、尊い人がいた。高齢になって、どのような宿業（＝前世からの報い）のせいか、流行病にかかって、危篤になったので、弟子たちが集まって泣き悲しんでいるとき、（その当時、）安倍晴明といって、神のような陰陽師がいた。（その晴明が）この様子を見て言うには、「今回のことは、（寿命により）命の限りを迎えるという運命だ。どうしても（避けることは）叶えられない。そうとはいえ、問１Ａ師への思いの深いような弟子などで内供の身替わりになろうと思っている弟子がいるならば、祈願してさし上げよう。それ以外には、どうしてもどうしても力及ばない」と言った。

　多くの弟子たちが集まっている中で、この話を聞いて、内供は苦しみが耐えがたいあまりに、「もしかしたら、（弟子の中に私の）身替わりになる人はいるか」と、並んで座っている弟子たちを順に見回すが、（弟子たちは）言葉では（私が替わってさし上げたいと）言うけれども、実際には捨てがたい命なので、それぞれ顔色を変えて伏し目がちになって、一人として「自分が、替わろう」と思っている様子はない。

　そのとき、証空阿闍梨という人が、年若くして弟子の中にいた。弟子としては末座の人なので、誰も思いもよらない中で、（証空が）進み出て内供に申すには、「私が替わり申し上げようと思う。そのわけは、仏法を重んじ、命を軽くするのは師に仕える（弟子が守るべき）きまりである。どうして、このことを聞きながら、（自分の）身と命を惜しむだろうか、いや惜しまない。（いつかは）むなしく捨てる身を、いま三世（＝過去・現在・未来）の諸仏に差し上げて、人間界の思い出にしよう。全くつらくない。ただし、八十である母が、存命しております。私以外に子どもがいない。もし、（その母の）許しを得なければ、自分（＝証空）の命を捨てるだけでなく、（私と母の）二人の命が尽きる（ことになる）に違いない。（そうならないよう、母に）よくよく道理を申し聞かせて、（今生の）別れを告げて（内供のもとに）帰って参ろう」と言って、座を立った。内供をはじめ、これを聞く人々は、涙を流して尊ぶことは限りなかった。

　（証空は）母のもとに行ってこのことを語る。「どうか、お嘆きなさるな。たとえ本来の願いのように（母上の）亡き後に（私が）残って、後世を祈り申し上げても、これ（＝師の身替わりになる）ほどの大きな功徳を作るようなことは、非常に難しい。今、師の恩を重んじて（師の）命に替わったならば、三世の諸仏も憐れみ、天衆・地類（＝天上界・地上界の神仏たち）も驚いてくださるだろう。その功徳を積み重ねて、母上の後世菩提に振り替え申し上げよう。これこそ、本当の親孝行なので、（私は）粗末な身一つを捨てて、（師と母上と）二人の恩にきっと報いよう。ましてやまた、老少不定（＝老いた者から順に死ぬとは限らない）というこの世の理だ。もし無為に（私の）命が終わって、問１Ｂ（私が母上より）先に死ぬことがありましたら、そのときに悔やんだとしてどうしようか、いやどうすることもできない。何事を今生の思い出にしたらよいか」と泣きながら（証空が）語るのを聞きながら、（老母が）涙を流し、驚き悲しむのも当然である。（老母が言うには、）「私の愚かな心は、功徳が多くなるようなことを願ってもいない。あなたが幼かった頃は、私に育てられたのだ。私が、高齢になった今は、あなたを頼りにすることは天地（を頼ること）のようなものだ。（私の）寿命が、今日明日とも知れない時に至って、私を捨てて、自ら決心して（私より）先に死ぬようなことはあまりに悲しいが、あなたの決心が固いことを考えると、師の命に替わったなら、あなたの来世（が救われること）については疑いない。もし今回のことを許さなければ、仏も（私を）おろそかにお思いになり、あなたの意志からも外れるに違いない。たしかに老少不定の命である。考えてみると夢幻のよう（に不確か）な（死ぬ）順番（の理）だ。もともとあなた自身の意志なのだ。早く浄土に生まれて私を救ってくだされよ」と言う。（老母が）涙を押さえて（このように）言ったので、証空は泣きながらも喜んで帰った。そのまますぐに年齢・氏名を（祈禱のための祭文に）書き付けて、晴明のもとへ遣わした。今晩祈って（命を）入れ替え申し上げる予定であることを、（晴明は証空に）伝えた。

　こうして、夜がだんだん更けていくうちに、当の証空は、頭が痛くなり、気分が悪く、体はほてって耐え難く思われたので、自分の部屋に行って（死後に残しておくと）見苦しいであろう手紙などを片付けながら、長年持ち申し上げていた絵像の不動尊に向かい申し上げて申し述べることには、「私は、年が若く、身体も盛りなので、命が惜しくないわけではないけれども、師の恩が深いことを思うので、今まさに師の命に替わろうとしている。勤行が少ないので、来世のことがこの上なく心配だ。どうか、明王よ（私に）憐れみをかけて、悪道に落としなさるな。病苦がもはや身を責めたてて、一瞬たりとも我慢できない。御本尊を拝み申し上げることは、これが最後だ」と泣きながら申し上げる。そのとき、絵像の仏が眼から血の涙を流し、「おまえは師の身替わりになる。私はおまえの身替わりになろう」とおっしゃる御声が、（証空の）骨に伝わり、肝に染みる。「ああなんとありがたいことだ」と手を合わせて祈って座っている間に、汗が流れた体が涼しくなり、間もなく気分が清々しくなった。

　内供もその日から問１Ｃ病気が治ったので、このことを聞いて、いい加減に思うだろうか、いや思うはずもない。その後は、（証空は）人に抜きんでて（師が）頼りとする弟子であった。